

晴読雨読

南 ふう

みなみ・ふう 本名・浜田京子。1954年生まれ。九州芸術工科大学卒。(株)渡久山設計勤務。長野県阿南町主催「祭り街道文学大賞」において「女人囃子がきこえる」で大賞受賞。沖縄エッセイスト・クラブ、まちづくりてだこ市民会議会員。



「月光浴」

石川賢治 写真・文

場所は病院の待合室、有線からは静かなオルゴール曲が流れていた。書棚にあった写真集「月光浴」。てっきり月の写真集だと思ってページを開くと、青白い夜の雪山で月は写っていない。だが隣にある一文に、私はくぎ付けになった。「この本の写真は、すべて満月の光だけを光源として撮影された」。え、月の光だけで写真が撮れる？

山ばかりではない。木立、湖、滝、花、きのこ、草原、溶岩、水中のサンゴ、海底の砂。地球上のさまざまな風景が、月明かりだけで、ほの青く、しかも見事に写しだされている。それらは昼間とは全く違う表情を持ち、一種異様で、けれどもなぜだか懐かしい。そして思うのだ。ああ、この青い惑星に生まれて、なんと幸せなことか。

一九八四年当時、二十

二年のキャリアを持っていた石川賢治氏自身も、月光で写真が撮れるとは思っていなかったそう

だ。たまたま散歩に出かけた海岸で見た月夜の光景。水平線、雲などが意外にはっきり見え、目の前を飛び去る鳥の羽先までが目に焼き付いたという。それから毎月、満月の夜にデータをやり取り続け、本格的に月光写真の撮影に取り掛かった。感性とオリシナリティー、そして地道な努力の積み重ねにただ頭の下がる思いだ。

このコラムに写真集を紹介することに、ちゅうちよはあった。が、これらは多くのことを語り、読むことのできる写真たちだ。メッセージ性を持ち、自然への謙虚な気持ちさえ呼び起こしてくれる。そしてそんな気持ちになれた時、人は不思議な体験をする。

地球の鼓動に耳を澄ます

私は待合室で、この写真集に出会った奇跡に感謝し、「月光浴」に魅入っていた。その時それは起こった。不思議な共鳴を感じて耳を澄ますと、有線から流れてきたのは、オルゴール曲に編曲されたドビュッシーの「月の光」だったのだ。なんとというシンクロニティだろう。さらにこの寄稿依頼があった時、私は自分へのクリスマスプレゼントとして「月光浴」を注文したところだった。

私自身は、氏のように科学的データの蓄積も知識もキャリアもない。ただ感受性だけは共通するものがあるように思える。前述のシンクロニティも、人によってはささいな偶然だと言いかもしれない。だが私には、宇宙の波動のようなものと同調したと感ずるのだ。

写真集にはわずかな文章が記載されている。それは単に科学的、客観的事実の表記である場合が多い。「月光の明るさは、太陽光の四六五〇〇〇分の一」「月が反射しているのは、太陽光線の約七パーセント」……そしてあとがきと写真説明。その文章ひとつひとつが、研ぎ澄まされ、絞り込まれたメッセージだ。

たまには街に溢れかえる電子音や騒音から遠ざかって、静かな時を過ごしたい。「月光浴」から石川賢治氏の言葉を借りよう。「地球の鼓動に耳を澄ます」。